

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04786

研究課題名（和文）戦前期中等学校国語科教科書における古典教材の採録状況に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Status of Classical works in Japanese Language Textbooks for Secondary Schools in the Prewar Period

研究代表者

小笠原 拓 (OGASAWARA, Taku)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：20372675

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦前期中等学校国語科教科書における古典教材の採録状況について、可能な限り広範囲かつ正確に明らかにすることを目的として企図されたものである。研究過程において、先行研究が積み残してきた課題を明らかにし、新たな研究課題として、戦前期中等学校国語教科書目次データベースの作成の必要性について論じた。さらにその基盤となる作業として、高等女学校および師範学校・実業学校の戦前期中語教科書一覧を作成し、戦前期中等学校国語科教科書の出版状況の一端を明らかにした。またこの時期、広く用いられ、何度も版を重ねて出版された国語教科書に着目し、その教科書における古典教材の採録状況について分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において提示した戦前期中等学校国語教科書目次データベースは、実現すれば、戦前期の中等教育における国語教材の詳細な実態を知る有力なツールとなりうるものであり、今後も共同的な研究が行われることが期待されるものである。また、古典教材の採録状況についての研究は、単に過去の教科書の実態を知ることにとどまらず、近年しばしば行われている、国語教育において古典教材を学ぶ意義についての議論に一石を投じるものとなると考えている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify as extensively and accurately as possible the status of classical materials in prewar secondary school Japanese language textbooks. In the course of the research, we clarified issues left unresolved by previous studies and argued for the necessity of creating a database of the table of contents of prewar secondary school Japanese language textbooks as a new research topic. As a basis for this work, we compiled a list of prewar Japanese language textbooks from high schools for girls and from teachers' and business schools, and clarified some aspects of the publication status of prewar secondary school Japanese language textbooks. We also focused on Japanese language textbooks that were widely used and published in multiple editions during this period, and analyzed the inclusion of classical materials in these textbooks.

研究分野：国語教育学

キーワード：国語教科書 戦前期中等教育 古典教材 目次データベース

1. 研究開始当初の背景

中等教育における国語科の内容編成、なかでも古典領域については、国語教育研究領域のみならず、様々な角度から議論が行われている。近年においても、前田(2018)、勝俣(2019)など、古典教材の必要性の有無について論じる書物が相次いで出版されており、耳目を集めている。この背景には、メディアや環境、さらには金融やプログラミングなど、新たに教育が必要とされる領域が近年数多く現れていることがあると考えられる。新たな教育領域の存在が、これまで当然のように行われてきた古典教育領域を侵犯しつつあるという見方もできるだろう。

しかしこのような議論を行う上で、過去の古典教育がどのように行われてきたかについては、十分な検討が行われている訳ではない。そもそも、これまでの国語教育史研究において、戦前期の中等学校国語科教科書に関する研究は、基礎的な情報が十分に整備されていない形で進められてきた。戦前の中等学校は小学校とは異なり、その大部分において検定制度が維持されたため、数多くの教科書が出版され、戦前期全体について教材の採録状況の変遷等を通覧できるような資料を作ることが困難だったからである。

例えば、最も多くの戦前期の教科書を所蔵する図書館の一つである東京書籍株式会社附設教科書図書館・東書文庫(以下、東書文庫)では、戦前期の中学校用国語科教科書 3,066 冊、高等女学校用教科書が 1,678 冊、師範学校用教科書が 404 冊、それぞれ所蔵されていることがわかる。また、東書文庫と並んで戦前期の教科書所蔵する国立教育政策研究所附属教育図書館(以下、教育図書館)には、検定期の教科書だけで中学校用国語教科書が 2,230 冊、高等女学校用教科書が 2,621 冊、師範学校用教科書が 324 冊、それぞれ所蔵されている。これら全ての教科書を網羅的に検証するには、多大な労力が必要となることは言うまでもない。

さらに検定期以降の教科書について問題となるのは、対象となる教科書が検定を通過したかどうか、その有無を確認しなければならないという点である。先に挙げた東書文庫や教育図書館およびその他の図書館に所蔵されている教科書は、検定申請するために提出された教科書(見本本)、検定に合格した教科書(検定合格本)、検定後に実際に各学校へ供給された教科書(供給本)、検定により通過できなかった本などが混在している。とくに東書文庫や教育図書館のそれは、多くが見本本や検定合格本であり、「文部省検定済」の印が付された供給本と違い、一目でそれが検定を通過したのか否かを確認することができない。この点について現在は、1985(昭和60)年から1986(昭和61)年に復刻された『検定済教科用図書表』(復刻版、解題・中村紀久二、芳文館)によって検定の有無を確認することが可能となっているが、その手続きはかなり煩瑣なものである。いずれにせよ、ここで確認しておきたいのは、単に量的な多さによって網羅的な研究が困難であるというだけでなく、残されたすべての教科書の内、研究対象とすべきものとそうでないものを選び分ける点でも難しさがあるということである。

無論、このような状況において、その全体像を把握しようとする研究がなかったわけではない。井上(1981)や教科書研究センター(1984)等によって代表的な中等教科書を手掛かりとして、その内容の変遷等について通史的な流れが概観されるようになった。また、田坂(1984)は、戦前までの中等学校講読用の国語教科書のうち約 2000 冊を調査対象とし、その目次に基づいて作成された採録教材の内容索引を作り上げた。この研究によって、この時期の中等学校教科書に採録された教材について、その変遷等を大局的に比較することが可能となった。

とはいえ、その後の研究も含め、多くの中等学校国語科教科書に関する研究は一部の教科書を対象としたものであり、様々な学校種(中学校・高等女学校・師範学校・実業学校)に応じて異なる教科書が出版されていたにもかかわらず、それらを網羅的に捉え、その実態を明らかにするような研究はほとんど行われてこなかった。結果として、戦前期の中等学校における古典教材の採録状況については、一部の教科書の分析にとどまっており、その全体像を捉えることが十分にできていない状況にある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦前期の中等学校国語科教科書における古典教材の採録状況について、可能な限り広範囲かつ正確に明らかにすることである。特定の作品についてのみ検討するのではなく、古典作品全体が、戦前期の中等学校教科書のなかでどのように採録され、それは時代によってどう変容してきたのか、その変容の要因や背景も含めて検討することができるような、基礎的な情報の整備を行うことを目論むものである。戦前期の中等学校国語科教科書の研究は、国定教科書制度のもとで進められてきた小学校と比較して、未だその全体像が十分に捉えられているとは言い難く、研究的な空白部分も少なくない。そこでまず、その研究的空白を埋めるために必要な基礎的作業の手順について明らかにするとともに、その帰結として求められる戦前期中等学校国語科教科書の目次データベースの作成を目指すこととする。後で詳しく述べるように、本研究の最終的な目的である戦前期中等学校国語科教科書目次データベースの作成は、作業量的に到底一人でできるものではない。完成までには多くの方々の協力が前提となる。そこで本研究では、まずその基盤となる作業を行うとともに、基盤的な作業を通じて見えてきた古典教材採録状況の一端を明らかにする。さらに実際の作業量やそのために必要な協力体制の構想について

も触れ、今後の長期的な研究課題についても検討したいと考えている。

3. 研究の方法

具体的には以下の二つの方法によって研究を進めた。

一つ目は、戦前期中等学校国語科教科書出版一覧の作成である。これは作成を目指す戦前期中等学校国語科教科書目次データベースの基盤となるものであり、実際に出版された教科書の内、教科書検定を通過した教科書がどれであるかを同定するために是非とも必要な作業である。既に信州大学の八木雄一郎氏によって非公式に中学校についての一覧が作成されていたことが研究過程で明らかとなったため、本研究では高等女学校および師範学校・実業学校の一覧を作成し、戦前期の中等学校国語科教科書の出版状況の把握に努めた。

二つ目は、戦前期の中等学校国語科教科書のうち、明治から昭和にかけて長期間使用され、多くの読者をもったとされる『中学国文教科書』（光風館書店）に着目し、その目次内容を分析することである。特定の教科書とはいえ、様々な改定を繰り返しながら長く検定に通り続けたものに焦点を当てることによって、古典教材の採録状況の時代的な変遷について、様々な角度から検証することが可能になると考えた。具体的には徒然草、太平記、奥の細道、などの作品に着目し、その採録のされ方の変化について分析を行った。

4. 研究成果

(1) 高等女学校および師範学校・実業学校国語教科書一覧表の作成から

この一覧表は、文部省編（1985-1986）『検定済教科用図書表』第1巻～第7巻（教科書研究資料文献、第3集-第9集）に記載された内容に基づき、高等女学校（一部高等女子師範学校）および師範学校・実業学校向けに発行された国語教科書について、その書誌情報及び検定状況に関する情報のリスト化を行ったものである。なお戦前期中学校、及び高等女学校国語科教科書については、眞有（2005）の巻末にある年表の中で同様の情報が年代ごとに掲載されているが、『図書表』内の項目の記載内容を確認するという目的もあり、今回はデータの抽出にあたって改めて『図書表』に直接当たり、改めて一覧表の作成を改めて行うこととした。具体的に一覧表においてデータの対象とした情報は、「学校種」「書名」「冊数」「発行年月日」「版数」「検定年月日」「著作者」「発行者」である。その他『図書表』において「修正」「修正二依り更二検定」などの補足情報が記載されている場合、その情報を「備考」として書き出した。また、昭和戦前期の検定において、教科書の全巻ではなく一部を対象とした検定が行われていたことが記載されており、その内容については「備考」として示した。

上記のような手続きに従って『図書表』から項目を拾い上げていった結果、高等女学校で用いられた国語教科書については、270種類の教科書のデータを抽出することができた。先にも述べたように、この270種類という数字は本来の教科書出版点数と比較した際、（筆者の見落としを除けば）やや多めに見積もっている可能性がある。それぞれの教科書は2-15冊程度（多くの教科書は8巻もしくは10巻）の巻数で構成されており、それらを合計すると2187冊という数字が出た。正確な数字は今後の検討課題とするが、おおよそ2000冊程度の出版点数があったということがわかった。一方、師範学校・実業学校の国語教科書については、あわせて159種類の教科書が出版されていたことを確認できた。師範学校の教科書は5-6冊で一組となっていることが多く、実業学校は8-10冊で一組となっているのが一般的である。但し、二部用、予科用など2-4冊程度で一組となっている教科書も少なくないことから、おおよそ1000冊程度の教科書が検定教科書として出版されていたということがわかった。

この一覧表は項目ごとに抽出することが可能であり、これにより当時の教科書出版状況について様々なことを知る事が可能になった。例えば以下の(表1)は、当時の代表的な教科書会社の一つである金港堂書店が発行した高等女学校国語科教科書を示したものである。

(表1) 金港堂書籍株式会社発行による高等女学校国語科教科書一覧

書名	巻冊	発行年月日	版数	検定年月日	著作者
女子日本読本	全1冊	明治29年3月31日	訂正再版	明治29年4月16日	新保鷲次
女子日本読本	全1冊	明治30年6月8日	訂正三版	明治30年6月14日	新保鷲次
女子国語読本	全10冊	明治35年3月26日	訂正再版	明治35年3月29日	吉田彌平 岡田美 篠田英 小島政
女子国語読本	全10冊	明治37年1月17日	訂正四版	明治37年2月9日	吉田彌平 小島政 篠田英 岡田美
再女子国語読本	全1冊	明治40年4月8日	訂正六版	明治40年4月12日	吉田彌平 小島政 篠田英 岡田美
三女子国語読本	全10冊	大正2年1月20日	訂正十版発行	大正2年1月27日	吉田彌平 小島政 篠田英 岡田美
修女子国語読本(実用)	全1冊	大正4年1月13日	修訂四版発行	大正4年1月19日	吉田彌平 小島政 篠田英 岡田美
三女子国語読本	全10冊	大正4年1月22日	訂正十二版発行	大正4年1月22日	吉田彌平 小島政 篠田英 岡田美
新撰女子国語読本	全1冊	大正8年1月20日	訂正再版	大正8年1月30日	吉田彌平 小島政 篠田英 岡田美
四女子国語読本	全10冊	大正8年1月15日	訂正十四版	大正8年2月20日	吉田彌平 篠田英 小島政 岡田美
新女子国語読本(実用)	全1冊	大正9年2月12日	訂正六版	大正9年2月18日	吉田彌平 篠田英 小島政 岡田美
女子現代文読本	全5冊	大正10年6月5日	訂正再版	大正10年6月11日	奈良女子高等師範学校高等女学校国語研究会
五女子国語読本	全10冊	大正11年1月17日	訂正十六版	大正11年1月28日	吉田彌平 篠田英 小島政 岡田美
五女子国語読本	全10冊	大正12年12月31日	訂正十七版	大正13年1月30日	吉田彌平 小島政 篠田英 岡田美

六訂女子国語読本	全十冊	大正14年2月12日	訂正十九版	大正14年2月18日	吉田彌平 小高政吉 篠田環英 岡田正美
女子国語読本	全八冊	大正15年2月24日	訂正	大正15年3月2日	吉田彌平 篠田環英 小高政吉
新定女子国文	全十冊	昭和3年1月24日	訂正再版	昭和3年2月2日	吉田彌平
女子現代文選抄	全五冊	昭和5年1月24日	訂正再版	昭和5年1月29日	吉田彌平
新訂女子国文 改訂版	全十冊	昭和8年1月12日	訂正四版	昭和8年1月18日	吉田彌平
新定女子国文	全十冊	昭和12年11月23日	訂正再版	昭和12年12月16日	吉田彌平

この表によると、金港堂は新保警次『女子日本読本』、吉田彌平他『女子国語読本』、吉田彌平『女子国文読本』という三種類の教科書を主に出版していたことが分かる。さらにそれぞれの教科書における検定期間がほぼ重複していないことから、それぞれの教科書が前の教科書を引き継ぐような形で出版されていたことを見ることが出来る。また検定の間隔は一定とは言えないものの、ほぼ1～3年程度の間で行われていたことも見て取ることが出来る。但しこのような出版の仕方は、教科書会社ごと異なっていたことも、他の教科書会社を抽出したデータによって明らかになった。一覧表を作成することによって、様々な教科書会社の教科書出版状況を確認することができ、その多様性についても明らかにすることができた。

(2) 『中学国文教科書』(光風館書店)の分析から

この『中学国文教科書』(訂正再版)に書かれた「例言」によると、採録作品については、あくまで中心は「時文」(現代文)であるが、学年を経るにしたがって必要に応じて「古文」を採用するという姿勢を編者はもっていたようである。そこで注目したいのが、戦前期なかでも明治期の人々にとっては、比較的身近な存在であった近世期の文章である。現在の中学校および高等学校では数多く採録されている平安期の文章は、正式には1931(昭和6)年の「中学校令施行規則の改正」まで採録の対象とはなっていなかった(井上(1981))。よって近世および中古の作品が主な古典作品として扱われることが多かった。このような法令による古典の時代指定が教科書編纂に対してどの程度拘束力があるかについては疑問がないとも言えないが、少なくともこの『中学国文教科書』は、目次内容を通覧する限り、比較的法令に準拠した作品の採録基準をもっていたようである。ここでは、現在の国語教科書でも「定番」となっている松尾芭蕉の作品について、その掲載状況を見てみることにする。松尾芭蕉の作品について、対象とする8種の検定通過教科書における採録状況は以下の(表2)の通りであった。

(表2) 松尾芭蕉作品の採録状況

	作品名(掲載巻・課数)
訂正再版(M40)	・十八桜の記(巻7・7課) ・平泉(巻9・19課)
修正4版(M44)	・十八桜の記(巻7・15課) ・平泉(巻9・12課)
修正6版(M45)	・十八桜の記(巻7・15課) ・平泉(巻9・12課)
修正8版(T1)	・十八桜の記(巻7・15課) ・平泉(巻9・12課)
修正10版(T4)	・平泉(巻8・5課)
修正15版(T12)	・平泉(巻7・2課) ・幻住庵の記(巻10・12課)
修正23版(S9)	・奥の細道(巻7・10課) ・幻住庵の記(巻10・9課)
補訂訂正再版(S13)	・奥の細道(巻7・10課) 出立、平泉、立石寺、金沢 ・幻住庵の記(巻10・9課)

この表を見る限り、芭蕉については、明治から昭和にかけてコンスタントに採録され続けており、採録箇所も現在の中学校の教科書で数多く採録されている「奥の細道」の「平泉」が中心となっている。また採録されている巻も巻7から巻10が中心で比較的上級学年で学ぶ教材として位置付けられていたことがわかる。強いて変化を挙げるとするならば、昭和に入ってから「平泉」単独の採録ではなく、「奥の細道」として採録され、「出立」など現在でも扱われている著名な箇所が掲載されるようになったことが分かる。松尾芭蕉については、戦前から戦後にかけて教科書教材としての評価に大きな変化はなく、少なくとも本教科書においては「定番」としての扱いを受けていたことがわかった。

松尾芭蕉以外にも、新井白石や「徒然草」、「太平記」などについて、同様の分析を行った。それぞれの作品群について、現代との扱われ方の違いが見えてくるとともに、時代ごとの扱われ方の変化についても明らかにすることができた。例えば新井白石は、近年の教科書ではほとんど扱われることはないが、この教科書では、松尾芭蕉と同様に、明治から昭和にかけてコンスタント

に採録され続けていた。それどころか、作品数という意味で言えば、芭蕉以上に多くの作品が採録されており、採録箇所もバラエティに富んでいることが明らかとなった。基本的に歴史上の人物について論じた文章が数多く採られていることからみると、現在で言う伝記のような作品として扱われていた可能性もある。また採録箇所が巻3～巻5に集中しており、比較的低学年から中学年にかけて使われる教材として見なされていたと考えられる。ここには明らかに戦前と戦後の断絶が現れており、内容面だけでなく文体面からみても、現代と戦前の間にある文章観の変化が反映しているとみることができ。また「徒然草」は、初期の教科書においては、巻9という最終学年に集中的に配当されており、巻10に採録されている「平家物語」と並んで、最終学年の中心的な教材として位置付けられていた。しかし大正期になると、巻6や巻7に配当されるようになり、昭和期には、巻5から巻7までに1課ずつ配当される形に変わっていった。一方、「太平記」は、実際に1902（明治35）年の教授要目において、第4学年の「近古文」の例として挙げられているが、比較的初期の段階から早い学年にも配当されることがあり、全体として万遍なく配当される傾向があった。「徒然草」と比較すると、それほど、配当学年の変化が極端なものではなく、各時代における難易度の認識が大きくは変化していない教材であったことがわかった。

上記のような分析は『中学国文教科書』という種類の教科書に限ったものであるが、それだけでも、現代との違いや時代ごとの変遷が捉えられ、今後の国語教科書における古典教材の採録を考える上で示唆に富むものである。今後は、より多くの教科書について同様の分析を行い、かつそれらを比較することができるように、戦前期中等学校国語科教科書目次データベースの作成を目指したい。

引用・参考文献

- ・ 井上敏夫編（1981）『国語教育史資料』第2巻（教科書史）東京法令。
- ・ 増淵恒吉編（1981）『国語教育史資料』第5巻（教育課程史）東京法令。
- ・ 田坂文穂編（1984）『旧制中等教育国語科教科書内容索引』教科書研究センター。
- ・ 教科書研究センター編（1984）『旧制中等学校教科内容の変遷』ぎょうせい。
- ・ 文部省編（1985-1986）『検定済教科用図書表』第1巻～第7巻（教科書研究資料文献、第3集-第9集）
- ・ 中村紀久二（1986）『検定済教科用図書表 解題』芳文館。
- ・ 坂口謙一（1993）「戦前我が国諸学校における「実業教科」の検定教科書一覧—1940年代初頭までの手工科、工業科、実業科（商業）教科書—」名古屋大学教育学部編『技術教育学研究』8。
- ・ 浮田真弓（1998）「明治中後期中等学校国語読本教科書に関する一考察」人文科学教育学会編『人文科教育研究』25。
- ・ 橋本暢夫（2002）『中等学校国語科教材史研究』溪水社。
- ・ 眞有澄香（2003）「大正期の読本と雑誌—女子教育における文学受容—」全国大学国語教育学会編『国語科教育』54。
- ・ 眞有澄香（2005）『「読本」の研究—近代日本の女子教育—』おうふう。
- ・ 八木雄一郎（2008）「中学校教授要目改正（1931（昭和6）年）における教科内容決定の背景—「現代文」の定着に伴う「古典」概念の形成—」全国大学国語教育学会編『国語科教育』第65集。
- ・ 都築則幸（2013）「国語教科書が捨ててきたもの—伝統的な言語文化をどう教えてきたのか—」早稲田大学国語教育学会編『早稲田大学国語教育研究』33。
- ・ 中嶋真弓（2016）「吉田弥平編集「読本」における教材価値の考察—古典教材を視座に—」『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究編』41。
- ・ 外国語教科書データベース作成委員会（委員長：江利川春雄）「明治以降外国語教科書データベース」(<http://www.wakayama-u.ac.jp/~erikawa/index.html>)
- ・ 前田雅之（2018）『なぜ古典を勉強するのか』文学通信。
- ・ 勝俣基編（2019）『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』文学通信。
- ・ 菊野雅之（2022）『古典教育をオーバーホールする 国語教育史研究と教材研究の視点から』文学通信。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小笠原 拓	4. 巻 16巻 3号
2. 論文標題 戦前期中等学校国語科教科書に関する研究 教科書一覧表の作成と目次データの取り扱いを中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域学論集	6. 最初と最後の頁 43-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小笠原 拓	4. 巻 135
2. 論文標題 戦前期中等学校国語科教科書における古典教材の採録状況に関する研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語科教育研究	6. 最初と最後の頁 241-244
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小笠原 拓
2. 発表標題 戦前期中等学校国語科教科書研究の現状と課題 「高等女学校国語教科書一覧表」の作成を手掛かりとして
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小笠原 拓
2. 発表標題 戦前期中等学校国語科教科書に関する研究 教科書一覧作成と目次データの取り扱いを中心に
3. 学会等名 中国・北九州国語教育学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小笠原 拓
2. 発表標題 戦前期中等学校国語科教科書における古典教材の採録状況に関する研究
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関